

記憶を伝える、思いを継ぐ

戦後75年、平和への取り組み

第二次世界大戦(太平洋戦争)の終結から、今年で75年。戦火の時代を知る人は年々少なくなり、その体験をじかに聴ける時間はあまり長くありません。記憶が風化しつつある今、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぐことは、より一層重要性を増しています。

記憶を伝える側と受け継ぐ側、双方の視点から平和について考えてみましょう。

国市民協働課 94-4714

伝える人——伊勢原市被爆者の会

1945(昭和20)年8月、広島、そして長崎に世界で初めて原子爆弾が投下されました。苦難の中を生き抜いた被爆者は、今年過去最少となり、高齢化が進んでいます。

市内に住む被爆者で組織する「伊勢原市被爆者の会」も、当初30人以上の会員が10人を割るまでに減少。こうした状況でも皆さんは自身の体験を語り続けています。

仕事や結婚にも影響が及ぶので、精神的な負担も大きい。被爆者であることを身内以外には話さない人も多々います。私も職場には伝えなかったし、被爆者として認定を受けたのも50歳を過ぎてからでした。

語り部の活動

小淵さん 私は語り部として、市外の学校などでも講演を行っています。自分の体験以外にも話ができるよう、海外に行つて当時の状況を調べたりもしました。小淵さん 学校で話をするときは、雨の日ははだしで学校まで通つたこと、主食はサツマイモだったことなど戦時中の子どもの生活についてもふれます。子どもらしい感性で興味を持って聴いてくれる姿を見ると、語ることも無駄ではないと思えますね。

つなぐことは使命

大盛さん 若い人たちに話をすることが重要です。実際に体験した人が生きてい

伊勢原市被爆者の会
大盛 一郎 会長
(90歳、高森3丁目)
原爆投下の翌日、広島市内の爆心地に入る

小淵 義信 さん
(87歳、高森5丁目)
長崎市内で被爆



戦時中の子どもの生活についてもふれます。子どもらしい感性で興味を持って聴いてくれる姿を見ると、語ることも無駄ではないと思えますね。

大盛さん 若い人たちに話をすることが重要です。実際に体験した人が生きてい



講演する小淵さん

受け継ぐ人——中学生ヒロシマ平和の旅派遣団

市では、毎年市内4中学校の3年生を対象に平和作文を募集し、その優秀者を「中学生ヒロシマ平和の旅派遣団」として広島に派遣しています。

昨年、団長として派遣団に参加した卒業生に、お話を伺いました。

岡田 拓能 さん
(15歳、高森7丁目)



資料館の展示品の中には、同年代の子どもの遺品が数多くありました。戦時中も学校や生活があり、それが原爆によって一瞬で変わってしまったのだと思うと、不自由なく生きられる今のありがたさを実感します。

旅の中で特に印象的だったのは、平和記念式典と広島平和記念資料館です。式典は被爆者などの関係者だけが参加するものかと思っていました。外国人もたくさん参列していて、世界からも戦争を繰り返さないよう願いが寄せられているのだと感じました。

近所に防空壕の跡が残っていると聞いたことがありますが、実は身近にも戦争の痕跡はあらず。まずは知るきっかけを作ることが大事だと思います。

未来の平和を守るために

最近、小学生の間でも戦争ゲームがはやっています。小さい子どもたちの会話で、ゲームに出てくる実在の銃の話が出てくるんです。仮想世界でそういう体験をした子が平和の旅に行つても、実感が持てないのではと不安になります。

体験した人がいなくなっても戦争があった事実を忘れてはいけません。戦争のない世界を作れるかは、僕らの世代にかかっています。過去のことは変えられませんが、将来戦争を絶対に起こさないという軸を持つて生きなければと思います。



昨年の平和の旅の様子(右から4人目が岡田さん)。なお、今年度は実施しません

もの言わぬ証人——記念碑が伝える戦争

記憶を伝えるのは人だけではなく、市内には、戦争に関する記念碑が各所に残されています。彼らのメッセージに、耳を傾けてみませんか。

平和慰霊塔

市民の森ふじやま公園内の丘に立つこの塔は、市内の戦没者の家族で組織する市遺族会から「平和の象徴となる場を」との要望を受け、昭和55年に完成しました。高さは10メートル、正面と側面が御影石で飾られ、春には周囲を桜が彩ります。

毎年10月に開催する「伊勢原市戦没者を追悼し平和を祈念する式典」の日には、市内6カ所にある地区慰霊碑とともに献花が行われ、戦争で命を落とした874柱の冥福と恒久平和を祈ります。



「輝け杉の子」像

大山阿夫利神社下社の横に立つ、男女2人の子どものブロンズ像。これは、大山地域が川崎市からの学童疎開を受け入れたことから、戦後40年をむかえた1985(昭和60)年に当時の児童や教職員らにより建てられたものです。生田緑地(川崎市多摩区)にも同じ像があります。

およそ3千人の子どもたちが終戦までの約1年を大山で過ごし、空襲で、残念ながら1人の児童が亡くなっています。



三之宮比々多神社招魂社
境内の一角に、西南戦争から第二次大戦までの出征者が刻まれた記念碑13基が並ぶ場所があります。毎年1月2日と10月の第3日曜日には、ここで慰霊祭が行われ、比々多地区から出征

未来に語り継ぐために——市の平和史料収集・公開事業

平和意識の啓発を図るため、戦争の記憶やその時代を示す品々を平和史料として記録・収集し、ホームページなどで公開しています。

写真で見る平和資料

市民が所有する戦前・終戦直後の生活を表す物を写真に収め、市ホームページにアップし、ガイド「平和事業」に掲載しています。

子どもの戦意高揚を図る内容が描かれたカルタや空襲で投下された焼夷弾、軍服などからは時代の空気が垣間見えます。



少国民カルタ

陸軍で使用された軍服

戦争体験インタビュー

戦時中の伊勢原の様子や軍隊での生活などについて、当時体験した市民にインタビューした映像をDVDに収録し、一部を図書館で貸し出しています。

これまでに16人から貴重なお話を伺いました。取材や撮影、編集は東海大学文化社会学部広報メディア学科に協力を依頼。戦争体験者から若者へ、体験を継承する役割も担っています。



インタビュー映像のシーン

世代をつなぐ対話

東海大学文化社会学部
広報メディア学科
水島 久光 教授



市の平和事業に携わったのは平成26年からです。戦後70年を前に市内の戦争体験者のインタビュー映像を残したいと依頼があり、学生と共に取り組むことになりました。

以前からメディアと戦時記憶の研究をしていたので、当初はその延長線上のプロジェクトと

思っていました。しかし翌年、中学生ヒロシマ平和の旅派遣団の映像記録を残す仕事に加わり、事業の意味が変わりました。それは「世代を超えて歴史をつなぐ」課題に応えることです。

通常記憶を伝えると言え、知る者が知らぬ者に対して一方的に「語り」聞く関係が想定されます。しかしそれでは一時の印象は残っても、本当に考えねばならない意味—「なぜあのような非道な行為に人々は手を染めてしまったのか」を自分事として捉えられませんか。だから私は、学生たちと体験者との対話を大事にしました。

この5年の間にも、インタビューした何人かの方が亡くなりました。やがて来る語り手なき時代には、戦争の傷痕は記憶から記録へと移行します。「戦争を知らない子どもたち」である我々は自ら積極的に資料を読み、主体的に話し合う態度で臨まねば、それらは過去に埋もれ、忘れられてしまうでしょう。しかし事業に参加した子どもたちには、それに抵抗する力が身に付いていると思います。

本当につなぐがねばならないのは、未来の平和への希望です。こうした対話の輪がさらに広がることを期待してやみません。

◇いずれの事業も、協力いただける人を随時募集しています。詳しくは担当にお問い合わせください。

第34回平和のつどいを中止します

平和のつどいは、市平和都市宣言の理念である恒久平和の実現と核兵器廃絶を目指して、関係団体などの協力を得ながら市民が企画・運営を行っています。

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、今年の平和のつどいは式典・展示共に行いません。申し訳ありませんが、ご理解をお願いします。

戦没者の冥福と平和を願い黙とうを

原爆による死没者や戦没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するため、原爆投下日と「戦没者を追悼し平和を祈念する日」には、家庭や職場などで1分間の黙とうをお願いします。

黙とう日時 【広島】8月6日(木)午前8時15分
【長崎】8月9日(日)午前11時2分
【戦没者を追悼し平和を祈念する日】8月15日(土)正午

福祉総務課 94-4719